

Time in T.S. Eliot's Four Quartets(T.S. エリオット『四つの四重奏』における時間)

山口, 敦子

<https://hdl.handle.net/2324/1500463>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文題目

Time in T. S. Eliot's *Four Quartets*(和訳：T. S. エリオット『四つの四重奏』における時間)

氏名 山口 敦子

論文内容の要旨

本論文は英国詩人 T. S. エリオットの後期長編詩『四つの四重奏』（*Four Quartets* 1943 年）において、その思索と感性の中核をなしている「時間」についての研究である。この詩は詩人に靈感を与えた土地より題名を取る 4 つの詩篇「バート・ノートン」、「イースト・コーカー」、「ザ・ドライ・サルベージズ」、「リトル・ギディング」により構成されている。従来その抽象的な内容のために日本では研究されることの少ない作品であった。エリオットがこの詩で試みたことは人間が「時間の中に居る」ことの意味を永遠との関係において見出すことであったと考えられる。本論文の目的は、各詩篇における時間の内面化の表現を調べ、詩人がいかなる意味を時間の中に見出したかを論じることにある。その際、詩人の時間に関する省察と想像力の中に伝統的な時間論—特にプラトンとアウグスティヌスの時間論—への共鳴が見られること、また詩人が詩作という行為の意味を時間、そして永遠との関係において捉え直していることを併せて考察するが、これらの視点は本研究の独創的な点である。本論文の構成は 4 つの詩篇それぞれに 1 章をあて、各章は 2 部に分かれる。

「序論」ではエリオットの初期の文芸批評に彼の「時間」への関心の高さを見出し、本論文のテーマと関連する先行研究について要約する。

第 1 章「バート・ノートン」の第 1 部「記憶—永遠がおとずれる場所」では時間が記憶という人間の心の働きとして内面化されていることを論じる。詩人は記憶の深奥で「永遠」の顕現を経験する。ここではアウグスティヌスの記憶論を応用しながらこの詩における記憶の働きを考察する。第 2 部「永遠の動く似姿としての時間」では「回転する世界（時間）の静止点（永遠）」の詩行に象徴される時間と永遠の関係に焦点を当てる。プラトンの時間論に照らしながら、詩の最終部に至るまでは「時間」は「永遠」の近似として表象されていること、最終部の“the Word”の導入により、「静止点」がキリスト教における神の愛として同定されることを指摘する。

第 2 章「イースト・コーカー」ではこの詩が歴史的時間を扱っていると考察する。ここでいう歴史的時間とは聖書に基づく歴史の時間、すなわち世界の創造と人間の墮落を「始め」、キリストによる贖罪を「真ん中」、最後の審判を「終わり」として結ぶ直線的な時間である。第 1 部「時間の

記録—『イースト・コーカー』における歴史的時間」では、詩人が過去の現在性を示すために文書の記録というモチーフを用いていること、また時間の連続性のイメージに「始め」と「終わり」の意識を与えることで歴史的時間の概念を導入していることを指摘する。第2部「真ん中の意識」では、人間が今居るところとしての中間時のイメージとその変容—迷いと不安の暗闇から、自己認識と魂の浄化の過程を通して真実を照らす暗闇へ—を調べ、中間時が永遠に接近することのできる意味ある時間として捉え直されていることを論じる。

第3章「ザ・ドライ・サルベージズ」では時間の内面化が物語を語る声によって為されていることを指摘する。第1部「風景が声をもつとき—『ザ・ドライ・サルベージズ』における物語」では海を巡る声が3つの物語—求知心の果てに「終わり」を見出せず自滅したオデュッセウスの物語（『神曲』に拠る）、水死した漁師達と残された女たちの嘆きの物語、そして受胎告知を記念するアンジェラスの鐘の音が語るキリストによる人間の救済の物語—を語っていると考察する。これらの物語を通し、この詩が祈りと聖母の慈悲によって見出される終わり＝救済への予期に焦点を当てていると指摘する。第2部「声の変容」では、詩人自身の声について分析する。エリオットは「詩における三つの声」という批評の中で詩人の声を三つに分類しているが、この分類に沿って詩人の声の変容を調べ、詩人の声が時間を内面化していることを述べる。

第4章「リトル・ギディング」では、この詩が永遠の、時間への受肉を扱っていると解釈する。ここで詩人は永遠の受肉を可能にするのは神の愛に対する人間の認識であるとしている。この認識が時間の内面化を生む。第1部「『祈りの効ありしところ』—『リトル・ギディング』の空間」ではリトル・ギディング教会が祈りという人間の行為により、永遠の時間への受肉を象徴する空間として描出されていることを考察する。第2部「『彼方』から『此方』へ—時間へ受肉する永遠」では、この詩において永遠の時間への受肉は、人間の心を中心とする神へ向かう内的な運動として捉え直されていると指摘する。そのため第1篇「バーント・ノートン」において「彼方」(*there*)にあるとされた永遠は、この詩では人間が今居る「此方」(*here*)にあると表現される。さらに詩作という行為は言葉の浄化にその意味があり、詩人の心を神の永遠に近づける行為であるとする詩人の悟りについて論じる。

結論では、以上『四つの四重奏』各4篇の詩における時間の内面化、時間と永遠の関係、言葉と時間そして永遠との関係を要約し、『四つの四重奏』は人間の時間が神の永遠を内在させる力をもつことの、エリオットの一つの証明であるとまとめる。